寛永寺：歴史

寛永寺の歴史は、1603年から1867年まで日本を支配した徳川幕府の歴史と分かちがたく結びついています。初代将軍徳川家康（1543年－1616年）は、その軍旗の下に全国を統一した後、本拠地江戸（現在の東京）の地位を事実上の首都に引き上げようとしてきました。古代の朝廷のお膝元である京都を凌駕するという意図を持って、幕府はその目標実現に向けて一連の野心的な建設・公共事業を実施しました。この取り組みは1620年代に最高潮に達し、家康の後継者となった息子の徳川秀忠（1579年－1632年）は、現在の上野界隈に3人の大名が所有していた土地を新たな仏教寺院の敷地とすることを命じました。

東の象徴

上野の地は、当時の日本でたいへん有名な仏教僧で、信頼の置ける幕府の助言者であった天海（1536年？－1643年）に寄進されました。天海は京都との結びつきが深く、その地で江戸幕府側の宮廷との連絡役を務め、また延暦寺の再建に取り組んでいました。延暦寺はかつてこの国で最も影響力のある仏教寺院でしたが、徳川幕府が出現する前の数十年に及ぶ戦乱期に破壊されました。他の一切の寺院に伍して、江戸の優位性を明らかにする寺院を建立するという使命を帯びた天海は、京都の聖地の江戸バージョンである「東の延暦寺」創建に取りかかりました。天海はこの寺院を東叡山寛永寺と名づけました。東叡山とは延暦寺のある山にちなむ「東の比叡山」を意味し、寛永寺は当時の元号である寛永（1624年～1644年）にちなみます。後者は、延暦寺が創建時の元号である延暦（782年～806年）にちなんで命名されたのとそっくり同じです。

寛永寺の山主の住坊は1625年に完成し、この年が寺院の創建年とされています。しかし、広大な境内の拡張はその後何十年も続き、また、京都のいくつかの有名寺院に見られる手法が取り入れられました。天海の弟子、公海（1608年－1695年）は師の死を受けてその跡を継ぎましたが、最終的には山主を退いて、当時の後水尾天皇（1596年－1680年）の皇子で

ある守澄（1634年－1680年）法親王に譲りました。この取り計らいによって寛永寺の威信が高まりました。

将軍霊廟の造営

寛永寺は幕府との結びつきが深かったため、繁栄と拡張を見ました。最盛期には、寺域は現在の上野恩賜公園全域より広く、山主は大きな宗教的・政治的影響力を誇りました。寛永寺の重要性は17世紀半ばにさらに高まりました。第三代将軍徳川家光（1604年－1651年）が、自ら創建を推進したこの寺院で自身の葬儀を執り行ってほしいという願望を表明しました。家光の後継者である家綱（1641年－1680年）と綱吉（1646年－1709年）はさらに先を行き、江戸城のすぐ南にある徳川家菩提寺の増上寺ではなく、寛永寺に自身を埋葬するよう命じました。こうした伝統との決別は僧侶を動揺させたため、結果、その後の将軍はこの2寺院で交互に埋葬されることとなり、徳川の治世が終わるまでその慣行が継続しました。

破壊と復興

幕府は1867年に崩壊しました。その年、天皇に忠誠を誓う革命軍が武家政権を打倒し、明治天皇（1852年－1912年）を新たな国家元首に据えました。徳川家の敗北は寛永寺の衰退も意味しました。1868年7月、すでに江戸は革命軍が掌握していましたが、幕府に忠誠を誓う約2,000人の志士が最後の抵抗を行うため境内に陣を敷きました。この忠誠の志士たちは完全に敗れ、占拠していた建物は消失しました灰燼に帰しました。新政府は寛永寺に冷淡でした。残った建物も一部を除いてほぼすべてが取り壊され、また、寺院の境内地は没収されて、後に上野恩賜公園となりました。寛永寺は1879年によりやく再建され、以来、上野恩賜公園の北側、何人かの徳川将軍の霊廟近くにひっそりたたずんでいます。